

教父と古典解釈

— 予型論の射程 —

秋 山 学 著

SAECULI NOVI INTERPRETATIO
POE SICE LIDESAIVSAEFLA LOMAIORACANAMVS
NONOMINESARBUSIAIVVANTHVMILESQAMYRICA
SICANTIBUSSILVASSILVAESINTCONSULEDIGNAI
ULTIMACUMAEVENTIAMCAAMINISAFIAS
MAGNUSABINTEGROSAECLORYAMNACIVRORDO
LAACREDITEFVIAGOREDIVNTSATVRNIAEIGNA
LAANOVAFROGENTIESCAELODIAMITIVRALT
TAMODONASCENTIEVROQVOTERRAEAMIVM
DESINETACTOTOSURGETGENAVREAMVND
CASTATAVEINCINATVUSIAMRIGNATAIOLLO
TEQVEADEODECVSTHOCATVTECONSULEINIBIT
POLLIOEFINCIENTMAGNETROCEDEREMENSES
TEDVCESTOVAMANENTSCLEMSVESTIGIANOSTRI
INITATERTIVASOLVENTFORMINETERRAS
ULLEDIVAMITAMACCHIEEDIVISQVEVIDEBIT
TERMINIOSHEROASEETSEVIDEBITVRILLIS
LACATVMQREGITATATSVIATVITVSORBIAM

創文社刊

教父と古典解釈

— 予型論の射程 —

秋 山 学 著



創文社

秋山 学（あきやま・まなぶ）

1963年、大阪府に生まれる。東京大学文学部、同大学院人文科学研究科西洋古典学専攻修士課程、総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程修了、博士（学術）。東京大学教養学部古典語教室助手を経て、現在、筑波大学文芸・言語学系講師。専攻：西洋古典学、地中海学、教父学。

〔共訳書〕『ニュッサのグレゴリオス 雅歌講話』（新世社、1991）、『中世思想原典集成2 盛期ギリシア教父』（平凡社、1992）、『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』（1995）、『ギリシア文学概説』（J・ド・ロミイ著、法政大学出版局、1998）、『中世思想原典集成20 近世のスコラ学』（2000）。

〔教父と古典解釈〕

著者との申し合せにより検印省略

藤原印刷・鈴木製本

発行所
株式会社

創文社

〒103-0043
東京都千代田区麹町二丁目一七
電話〇三―三三六三―七二〇一
振替〇〇二〇〇―〇一九二四七二

著者 秋山 学
発行者 久保井 浩 俊
印刷者 藤原 豊

二〇〇二年二月二五日
第一刷印刷
第一刷発行

ISBN4-423-17132-5

Printed in Japan

目次

序章	本書の構成と目的について——古典文献伝承と教父神学	三
I	西洋古典文献研究の現況	三
II	中世初期における文献伝承の概要	六
III	文献伝承史学成立の最古限——カイサレイアのアレタス	八
IV	現代神学思想の趨勢と教父学	九
V	終末論と文化受容のあり方をめぐって	一四
VI	予型論の視座について	一六
VII	本書の内容概観	一九
第一部 ビザンティン時代における人文主義の成立と神学		
第一章	地中海世界における書物史——カイサレイアのアレタスまでの文献史	三三
I	古代書物の外的状況	三三
II	寓意的解釈の展開——ヘレニズム期	三四

III	初期キリスト教時代における書物と書物観	三
IV	東西教父たちの書物観	六
V	ビザンティン時代における書物観	三
VI	フォティオスと『図書総覧』	三
VII	カイサレイアのアレタスの蔵書内容	七
VIII	愛書家としてのアレタス	四
IX	結—アレタスの地平の解明に向けて	四
第二章 アレタスの人文主義的神学——『黙示録注解』を中心に		
I	カイサレイアのアレタスの生涯	四
II	アレタスの『黙示録注解』	五
III	アレタスに至る『黙示録』注解の系譜	五
IV	アレタス『黙示録注解』の特質	六
V	アレタスの神学	六
VI	「モスクワ・ギリシア語写本二三」	七
VII	結—アレタスにおける人文主義的神学の地平と展望	七

第二部 カッパドキア教父たちの古典観と神学

第三章 バシレイオスと「ルネッサンス」——神学と人文主義の関係をめぐって…………… 八

I 序—バシレイオスとニュッサのグレゴリオスの古典観をめぐる問題…………… 一

II ビザンティン神学と人文主義（一）——テオドロスからマケドニア朝ルネッサンスへ…………… 五

III ビザンティン神学と人文主義（二）——パラマスとパライオロゴス朝／イタリア・ルネッサンス…………… 六

IV 西欧中世における神学と人文主義（一）——ベネディクトゥスからカロリング朝ルネッサンスへ…………… 九

V 西欧中世における神学と人文主義（二）——ベルナルと一二世紀ルネッサンス…………… 三

VI 教父時代のルネッサンス（一）——バシレイオスとニュッサのグレゴリオス…………… 四

VII 教父時代のルネッサンス（二）——模範としてのモーセ像…………… 七

VIII 自己認識および聖霊論と「ルネッサンス」…………… 一〇

IX 古典的教養の置かれるべき位相をめぐって…………… 一五

X 結—キリスト教的古典学成立の地平…………… 一七

第四章 ニュッサのグレゴリオスにおける「神の像」理解の変容——人間性の再構築…………… 一九

I 序—ニュッサのグレゴリオスの生涯と著作…………… 一九

II 「神の像」としての人間…………… 二二

III 「処女性について」…………… 二五

IV	「人間創造論」	二七
V	『靈魂と復活について』	二九
VI	盛期著作群	二三
VII	後期著作概観(一)	二七
VIII	後期著作概観(二)	三一
IX	『雅歌講話』	三六
X	結—グレゴリオスの著作活動の意味と「神の像」	四〇

第三部 終末論と予型論

第五章	オリゲネスの終末論の展開と証聖者マクシモス—アポカタスタシスを中心に	四五
I	ストウディオスのテオドロスにおけるマクシモス理解	四九
II	問題の射程	四六
III	マクシモス・コンフェッソル研究の現況	五〇
IV	終末論の史的展開	五五
V	マクシモスの終末論	六五
VI	マクシモスにおけるアポカタスタシス論	六八
VII	マクシモスにおける <i>πυλῶς-ἐκλύωσις</i>	七〇

	VIII	マクシモスとエウアグリオス	一七三
	IX	エウアグリオスとクレメンス	一七四
	X	結—マクシモスの終末論的救済観	一七九
	第六章	証聖者マクシモスにおける終末論と神化——旧約聖書解釈との関連で	一八〇
	I	序—マクシモスの生涯と著作	一八〇
	II	マクシモスによる「楽園の木」解釈	一八三
	III	マクシモスにおける恩寵と神化	一八六
	IV	マクシモスによる祈りと神化	一九〇
	V	マクシモスの聖書観	一九三
	VI	「体化」をめぐって	一九四
	VII	マクシモスの『ヨナ書』解釈	一九六
	VIII	結—マクシモスの両意説と古典学の方角性	二〇〇
	第四部	教父神学から古典解釈へ	
	第七章	アレクサンドレイアのクレメンスによる『オデュッセイア』解釈——古典の神学的受容	二〇五
	I	アレクサンドレイアのクレメンスの教父文献史における位置づけ	二〇五
	II	クレメンスによる『オデュッセイア』解釈	二〇七

III	クレメンスによる古典解釈の位相をめぐって	二二
IV	『オデュッセイア』からの検証	二七
V	クレメンス神学の概観(一)	二九
VI	クレメンス神学の概観(二)	三三
VII	クレメンスによるオデュッセウス像の変容	三七
VIII	「教父的」古典解釈の可能性をめぐって	三一
IX	結―古典解釈における教父神学の意義	三三
第八章	コンスタンティノス大帝とウエルギリウス『牧歌』第四歌―「異教予型論」と古典の受容	三五
I	古代世界におけるウエルギリウスの位置づけ	三五
II	『牧歌』第四歌の教父時代における受容	三六
III	コンスタンティノス大帝『聖なる人々の集いにおける演説』―ギリシア教父的『牧歌』解釈	四〇
IV	ウエルギリウスの古代大文字写本	四五
V	ウエルギリウス・ロマヌス	五七
VI	カロリング朝期におけるウエルギリウスの受容伝承	六一
VII	結―ウエルギリウスの位置―中世から現代へ	六四
結章	人文主義的教父神学の地平と終末論的予型論の射程―総括と展望	六六

目次

あとがき	三六
注	65
参考文献表	49
索引（人名・事項・古典著作・聖書・教父著作）	23
欧文要約	8

教父と古典解釈

——予型論の射程——

序章 本書の構成と目的について

——古典文献伝承と教父神学——

I 西洋古典文献研究の現況

西洋古典学研究の進捗は近年わが国でも目ざましく、各種の原典訳や研究書が多数出版されるようになった。古典作品そのものに関しては各種叢書の企画が盛んで、われわれは日本語訳でほぼ西洋古典の全容に接することができる⁽¹⁾。けれども日本には古典の手写本等の一次資料が存在しないため、ヨーロッパ各国で行われているような、古典原写本（ないしそのマイクロフィルム）を用いてのテキスト校合等の実践を望むことは、各種ファクシミリが相次いで出版されるようになってきたとは言え、現在のところ難しい。したがって、それら原典の伝承史に関する研究も、すぐれた欧語研究書の邦訳が何点か出版されるようになってきてはいるが、今なお途上にある⁽²⁾と言えるだろう⁽³⁾。

本書はもとより、このような西洋古典の写本伝承史等のさらなる追究をめざすものではない。古典作家たちの個々の写本伝承の実際については、すでに欧米の学者たちによってほぼ解明がなされている。この分野での画期的な業績としては、東方（ギリシア語）文献に関してはN・G・ウィルソン、西方（ラテン語）文献についてはL・D・レイノルズらの労作を挙げることができる⁽⁴⁾だろう。

従来、古典学は西欧におけるルネッサンス期において真の学問的方法を獲得し、近代的な意味での人文主義の名に値するものとなったと考えられてきた。だが「ルネッサンス」という語彙の内実そのものの再規定の試みもなされてすでに久しく、特にギリシア古典に関しては現存する小文字写本の最も遡及可能な最古限、九一〇世紀の「マケドニア・ルネッサンス」において「最初のルネッサンス」が成立したという見解も認められる。⁽⁵⁾ギリシア古典に関して、古文書学的検証——写生字、筆写の日付、蔵書家の名前等々の特定——が可能になるのは、九世紀末から一〇世紀初頭、特にカイサレイアの大司教アレタス（八四九／五〇—九四四）の時期からである。

地中海世界における古典文献の伝承史に関しては、東西において若干の差異は認められるものの、総じて教父たちの神学理論による古典受容を経たのち、中世初期の「暗黒時代」をくぐり抜け、九世紀ごろより小文字本への転写と並行して古典復興運動を迎えるという共通した現象を指摘することができる。それら文献筆写に携わったのは、総じてキリスト教聖職者・修道士たちであった。古典古代文学はキリスト教世界において「異教」文献としての位置づけを与えられるが、結果的に古典の遺産は、彼ら写字修道士たちの手で受け継がれていったのである。

近代以降の欧米の学問領域設定においては、人文学と神学とが分離されてしまったため、西洋古典研究および古典文献の伝承史的領域の研究と、それら文献の伝承に携わった中世修道士たちの神学思想研究および教父・教会史研究とは、これまで密接な連携の中で行われることがほとんどなかったように思われる。すなわち前者は、遺された古典の手写本から古典テキストの復元に専心的に向かうのに対して、後者は、教父たちのなかの人文主義的傾向をもった人々には関心を持つことが少なかつたと言えよう。九一〇世紀ごろのビザンティン・マケドニア朝の人文主義に関しても、従来の研究領域設定では、古典写本伝承の究明と、実際に写本筆写に関わった修道士たちの典礼生活や精神的次元の神学的研究、あるいは修道制の史的変遷の解明とが相互の関連のうちに行為されることは、極

めて困難であつた。先に挙げたアレタスに関しても、古典文献学の領域では、彼の蔵書の内実を古文書学的検証によつて明確にする作業、あるいはまだ活字として公刊されていない彼のスコリア等の一次資料を発掘することが急務であり、彼の主要な著作の一つである『ヨハネ黙示録注解』（以下『黙示録注解』と略）の内容的側面は顧みられることが少ないというのが実状である。一方、キリスト教文献学の立場からは、古典文献に対するアレタスの態度には関心が皆無であり、『黙示録注解』にしても、『黙示録』テキストの伝承史のなかでアレタスが取り上げられるのが通例である。⁽⁸⁾ 教父文献史の下限は八世紀のダマスコスのヨアンネス（六七五―七四九）に置かれるのが慣例であり、『黙示録注解』に関してアレタスの先駆者と言えるオイクメニオス（六世紀）やカイサレイアのアンドレアス（六―七世紀）は、かろうじてこの期間に収まるため言及がなされるが、アレタスはその枠外にあるため、教父学からも対象外とされるのが現状である。⁽⁹⁾

本書は、欧米古典学界で行われてきた西洋古典文献の伝承史的研究の上に立つて、現存する一次資料の古文書学的検証がアレタスにおいて可能となることの意義を重視してここから出発しつつ、総じてキリスト教修道士のなかでも人文主義的傾向を有する人々にとつて、異教とされるギリシア・ローマ古典と聖文献の両者を受容することがいかに可能であつたのかという問題をめぐり、写本筆写という行為や文献伝承の意味を神学史・精神史的次元から問いなおすことによつて、その理由を明らかにしようという試みである。その中で、教父神学のかなり煩瑣な事項にまで踏み込むことになろうが、その後に続いた人文主義神学者たちが聖職者階級にあり、専門的な神学議論にも内在的に関与していたことを勘案するならば、古典学成立の地平を明らかにする上で、教父神学史の確認は必要なプロセスだと考える。

II 中世初期における文獻傳承の概要

上述のように、東方ギリシアの文獻傳承に限つてみた場合、一般の古典受容史において、ビザンティンの六世紀後半から九世紀前半までは「暗黒時代」と規定され、古典の再発見と写本活動の再開を見るのは九世紀の半ば過ぎからである。「マケドニア朝ルネッサンス」と呼ばれるこの時期には、コンスタンティノポリスの総大司教フォティオス（八一〇—九三）や前述のアレタスら主に教会聖職者たちによつて、聖書や教父など聖文獻だけでなく、古典文化の再評価が行われることになる。もともとそれに先立つ聖画像破壊運動（イコノクラスム）の時期には、聖画像擁護派と破壊派の間の激しい闘争のために、学問そのものが顧みられなくなつていた。写本作業を基礎とする学的営為がルネッサンスの根底にあり、その精神性を準備する上で、聖画像擁護派の牙城となつたストウディオ修道院（コンスタンティノポリス）の意義は大きい⁽¹⁰⁾。

われわれが目にするのできるギリシア語写本の大半は小文字本であり、その導入の発端と功績をどのグループに帰すかに關しては、いまだに議論が絶えない⁽¹¹⁾。もともと小文字書体は草書体に基づき、草書体の普及に際しては、聖画像擁護の典拠涉漁のために速筆が要請されたであらう。従つて草書体の導入に關しては、やはりストウディオスの修道院長であるテオドロス（七五九—八二六）の働きが大きかつたと思われる⁽¹²⁾。テオドロスは写本活動を奨励するほか、修道院規則を確立して典礼形態を完成させたが、その際に規範となつたのは盛期ギリシア教父の一人でカッパドキア三星の一人、パシレイオス（三三〇—三七九）の著作であつた⁽¹³⁾。

このように「マケドニア朝ルネッサンス」の背後には、聖画像擁護運動を介してパシレイオス像ないし盛期教父

たちの神学思想が潜んでいる。実際、マケドニア・ルネッサンスの代表的人物の一人であるフォティオスの著作では、バシレイオスの卓越した文体が称賛されている。⁽¹⁴⁾あるいは時期は下るが、一五世紀のイタリア・ルネッサンス期においても、古典復興運動の先駆けとなったのは、レオナルド・ブルーニ（二三六九—一四四四）によるバシレイオス『若人に』のラテン語訳（一四〇三）であつたことが想起される。⁽¹⁵⁾このような形で、古典学を文献伝承史的に究めようとする場合にも、筆写活動ひいては古典の継承に携わつた人々の精神的地平にまで考察を進めるならば、教父たちの神学と霊性が介在してくるのである。また文献伝承史上、ビザンティンの同じ写字生が古典文献と教父文献の両方を筆写している場合、そのどちらかの制作年代からもう一方の成立年代が判明する場合があるということも、教父の知識が必須とされる所以であらう。⁽¹⁶⁾

西方の文献伝承に関しても事情はほぼ同様である。⁽¹⁷⁾すなわち西方の「暗黒時代」は五五〇〜七五〇年頃とされ、その後の「カロリング朝ルネッサンス」期に写本活動が再開される。古典文献の写本類について言えば、ウェルギリウス（前七〇—一九）などのわずかな古代末期写本を除けば、遡りうるその年代的上限はこのカロリング期に置かれ、その大半は東方と同じくやはり小文字本である。本書では東方のアレタスに対して、西方では古代大文字本の残存状況から、ウェルギリウスのR（ロマヌス）写本に特に焦点を当てて伝承史を考えてみたい。

古典文献・聖文献双方に関し、西方において伝承の役割を担つたのは、総じてベネディクト修道会の修道士たちであつた。会祖ベネディクトゥス（四八〇—五四三）自身は『戒律』のなかで写本作業について触れるところがあったため、⁽¹⁸⁾彼の同時代人カッシオドルス（四八五—五八二）による『綱要』が及ぼした影響の大きさがうかがわれる。⁽¹⁹⁾もつとも、ベネディクトゥスが『戒律』執筆に際してやはりバシレイオスによる『修道士大規定』を規範に仰いだことを考えると、西方の文献伝承の根幹にも、バシレイオスをはじめ初期・盛期ギリシア教父たちの姿があ